

# 系譜学を活用したキャリア形成の事例研究

— 見えざる家督を承け継ぐ —

Case Study of Career Development with Genogram  
- Connecting with the Ancestors -

中山 一郎\*

Ichiro Nakayama

キャリア教育の歴史は新しく、心理学・社会学・経営学・教育学などといった諸学問の成果や活用によって新しい学問として位置づけられ、確立されつつある。そのような発展途上の過程において、本稿では筆者自身がルーツ探しという体験を通して、自身のキャリア形成にいかなる影響を与えたのかという事例を検証するとともに、「系譜学」を活用したキャリア教育の可能性を新たに模索する。

キーワード：ルーツ探し、キャリア形成、都倉一族、浄土真宗、はからわな

## I. 緒言

「ルーツ探し」が静かなブームをよんでいる。きっかけのひとつは、NHKの『ファミリーヒストリー』であろう。それまでは本人でさえも知らなかった「家族の歴史を本人に代わって徹底取材し、『アイデンティティ』や『家族の絆』を見つめる」<sup>1)</sup>というコンセプトの下、本格的な取材調査をおこなって、その結果VTRを番組内においてはじめて本人に見せるというドキュメンタリーである。しかし、近年における「ルーツ探し」のブームは、実は今に始まったことではない。1977年にアレックス・ヘイリーの小説を原作とする『ルーツ』<sup>2)</sup>がアメリカでテレビドラマ化され、同年に日本でもTV放映されたときにも「ルーツ」という言葉は流行語となり、併せて自分の「ルーツ探し」が大いに流行った。ただし、かつてと昨今のブームを比較してみると、「ルーツ探し」という同じ行為ではありながらも、その行為に求める意味合いはやや異なってきたかのようと思われる。『ルーツ』の頃のブームは、ひと言でいうならば自分の先祖は「いったい誰であったのか」という謎を探究するような興味や関心であった。対して昨今のブームは『ファミリーヒ

---

\*流通科学大学人間社会学部，〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

ストーリー』という番組名が象徴しているとおおり、自分は一族や家族から「いったい何を承け継いだのか」という意味づけを求めるような思いや期待に、行為の目的は変化してきているように見受けられる。

「ルーツ探し」は、学問的には「系譜学」<sup>3)</sup>と呼ばれており、歴史学はもとより民族学や文化人類学、民俗学や社会学とのつながりや、昨今では精神医学や心理学、社会福祉学や教育学などといったフィールドにおいてもその理論や方法論は幅広く活用され始めてきている。

ちなみに筆者の専攻分野はキャリア教育であるが、その歴史はまだ新しく 21 世紀になってから産声を上げたばかりである。よって学問としての確立は未だ発展の途上にあり、たとえばキャリアデザイン学の創造と展開をすすめている笹川<sup>4)</sup>は「キャリア研究には心理学の他に歴史学や経済学など多様な学問から学ぶ必要があるとシャインものべているように、多様に展開した個別科学の成果の活用によって、『新しい人間学』としてのキャリアデザイン学は創られる」と述べており、筆者も基本的には笹川の考えに同意するところである。そして笹川が期待するところの「多様に展開した個別科学の成果と活用によって」に関しては、先のシャインがあげていたという学問はもとより、たとえば社会学、経営学、教育学などといった学問分野からのキャリア研究は現在ではすでにキャリア教育の核とさえ言えるものになってきている。

であるならば、キャリア教育においても、それらの学問と同様に「系譜学」の成果と活用の応用も可能ではないかと考える。そこで笹川の言葉を借りるならば、今後のキャリア教育における創造と展開のために「系譜学」を用いた研究手法の構築の可能性を新たに探っていくべく、以下、本稿ではその試論を述べていきたい。

## II. 先行研究の整理

### 1. 「系譜学」とその歴史

「ルーツ探し」という行為を「系譜学」という学問の一分野として位置づけたのは太田亮である。太田は「系譜学」とは以下の 4 つの内容をもつものとして定義している<sup>5)</sup>。(1) 氏、字、苗字、称号等、換言すれば、広義における氏の変遷と、これに付随する諸事情との研究を対象とする学問。(2) 史学の補助学として、歴史上必要なる氏の系統を研究する。(3) 一般史学を離れて、あらゆる家系、血系を研究し、それを基として社会変遷の真相を探らんとする学問。(4) 通俗的には、家々の系図を調査する学問と思われている。そしてその太田による系譜学研究は、1936 年に『姓氏家系大辞典』全三巻<sup>6)</sup>の刊行いう形で結実した。その後、太田の後継者ともいえる代表格が在野の研究者であった丹羽基二である。丹羽は 1960 年代後半から『家紋』<sup>7)</sup>や『姓氏』<sup>8)</sup>の刊行を皮切りに、家紋や苗字からルーツ研究を行っていくという今では一般化されている方法論を普及・確立させていった。一方、学界においては、1971 年に豊田武が『苗字の歴史』<sup>9)</sup>を著し、太田の研究以降、日本人の「苗字」について学問的にはじめて取り上げるに至った。さらに 1980

年代に入って、網野義彦は名前と系図を遡る行為を、「自己とはなにかを問うこうした疑問は、すべての人にとって共通した根本的な問いであり、それはまた歴史学の出発点といえることができる」<sup>10)</sup>と、それらの行為の重要性を説きつつも「姓名学、系譜学、紋章学の史科学としての確立にいたるまでには、まだまだ多大の未解決な課題が残されている」<sup>11)</sup>ことを指摘し、網野自らのルーツを事例として紹介しつつ姓名学、系譜学、紋章学といった史科学に向けての今後の期待を述べつつも問題を提起している。2000年に入ってからは、日本人の苗字と名前の起源や歴史の起源を探った坂田聡の『苗字と名前の歴史』<sup>12)</sup>、姓や苗字のルーツのみならず名前の歴史から日本や日本人論を考察した大藤修の『日本人の姓・苗字・名前』<sup>13)</sup>といった系譜学に関わる著書が刊行され現在に至っている。

## 2. キャリア研究に「系譜学」を活用した先行研究

ここでは大きく二つの先行研究を紹介しておくことにする。

ひとつは、民俗学者である柳田国男の『先祖の話』である。柳田は家の家督という言葉に注目し、家督には「有形の家督」と「無形の家督」があることを指摘している。前者は「不動産と同じ意味に、解し又は用いて居る場合も無いとは言えぬ」<sup>14)</sup>というように目に見える物を相続することであり、後者は「気性や健康の親譲りの遺伝、さては一人前になるまでの養育教育を恩と感じて」<sup>15)</sup>といった目には見えない物を相続することをいい、柳田は「家督は勿論土地で無くともよい。屢々滅失の危険にさらされる有形の財産よりも、寧ろかほど迄に親密であった先祖と子孫との間の交感を、出来るだけ具体的に知って居る方が、どの位家の永続に役立つか知れない」<sup>16)</sup>と、後者を前者以上に価値ある家督として述べている。

昨今のルーツ探しのブームは、自分は一族や家族から「いったい何を承継いだのか」という意味づけを求めるような思いや期待に、行為の目的は変化してきているが、この考えには柳田が指摘している「無形の家督」とは通底するものがある。ただし、柳田がいうところの先祖とは「自分たちの家で祭るのでなければ、どこも他では祭る者のない霊、すなわち必ず各々の家に伴うもの」<sup>17)</sup>という人たちのことであり、系譜学でいうところの先祖とは家系図などに記されている特定の人物のことを指している。本稿では柳田の家督に関する見解を踏まえつつも、「祭る先祖」のみならず「特定の先祖」からも「無形の家督」を承継ぎキャリア形成に影響を与えていくことが可能ではないかという知見を示唆していく。

そしてひとつは、「ジェノグラム」である。これはもともと家族療法家が臨床の場において、クライアントである家族の歴史や傾向を理解するためにその家族システムを図式化した家系図のことである。M・マクゴールドリックとR・ガーソンは「3世代以上の家族成員とその関係についての情報を記録するものである。ジェノグラムでは、家族に関しての情報が図示されているので、複雑な家族パターンも一瞬にして把握できる」<sup>18)</sup>と、このツールの効用を説明している。そうい

う意味では、ジェノグラムの活用と本稿のテーマとはその目的において一致するが、ただジェノグラムの場合は作成する家系図は3世代程度であり、しかも家系図の意味づけや解釈は家族療法家によって行われる。しかし本稿での対象は3世代にとどまらず、調査可能な時代にまで先祖を遡って家系図を作成し、そして先祖たち（特定の先祖）の行為に意味づけや解釈を行うのは他者ではなく、調査者自身であるという点においてジェノグラムの活用方法とは根本的に異なっているといえる。

### Ⅲ. 研究の方法と目的

本稿のテーマは『系譜学を活用したキャリア形成の事例研究』ではあるが、平たく言えば「ルーツ探しという行為を通して、人間としてより成長していくための気づきが得られたという体験者に調査を試み、その事例を分析し考察を行う」ということになる。そこで以下、まずは本研究の方法と目的について確認をしておきたい。

まずは研究方法であるが、先述の通り調査対象となるルーツ探しの体験者に協力を仰ぎ、体験者がそれを実践しようと思ったきっかけや動機、さらにはそれを通して分かってきた一族や家族の歴史といった基礎的な情報やデータを収集し整理をしていく。次いで収集した情報を分析しながら、ルーツ探しという行為を通して、体験者が人間として成長していくための気づきを得られたという、その「心の変容」にフォーカスし、それを行う以前と以降において一体何がどのように変わっていったのかという点に殊更注目し、「心の変容」の具体的な中身や内容を詳らかにしていく。

なお、本稿における調査対象者に関してひと言触れておかなければならない。実証的な研究活動において客観性を保持は自明のことであり、本来であれば研究趣旨に則った該当者に協力を求めて調査をすすめていくというのが筋ではある。しかし、本稿においてはあえて筆者自身がその調査対象者になることとした。客観性が求められる研究活動において当人をその研究対象とすることは極めて難しい。だが、本研究においてはその禁じ手をあえて破ることとした。理由は、筆者自身の体験が今現在、思いつく限りにおいて最適の事例となるのではないかと判断したからである。とはいえ、可能な限りの客観性を保持していく方法や手段として、筆者が研究活動において使用していたフィールドノート、手帳、公式文書といった記録資料を随時引用・参照しながら調査・分析・考察を行っていくことにする。そして研究の目的としては、ルーツ探し（系譜学）という行為が、なぜ人間の成長（キャリア形成）を促進していくきっかけになり得たのかという考察を行うとともに、今後のキャリア教育において、先にも述べた心理学、社会学、教育学、経営学、経済学などといった知のみならず系譜学の成果と活用を応用した新しいツールとしての研究手法の構築を目指していきたい。

## IV. 実証研究

### 1. 研究の動機

筆者がキャリアカウンセラーの資格<sup>19)</sup>を取得したのは2001年4月25日である。爾来、現在に至るまでキャリアカウンセラーという職業を生業としてきた。しかし、正直に告白すると、自分にはキャリアカウンセラーとしての絶対的必要不可欠である「何かが大きく欠落しているのではないか」という不安を長年抱き続けてきた。

ちなみにキャリアカウンセラーとは、「個人の興味、能力、価値観、その他の特性をもとに、個人にとって望ましいキャリアの選択・開発を支援するキャリア形成の専門家」<sup>20)</sup>のことである。そして専門家とは「ある学問分野や事柄などを専門に研究・担当し、それに精通している人」<sup>21)</sup>であるとするならば、有資格者としての最低限の知識（技能）は担保しているであろうということ、筆者は今日までおよそ15年間にわたって仕事をさせてもらってきたというのが本音である。

では、筆者自身が抱き続けてきた「大きな欠落感」とは一体何だったのであろう。少なくとも知識（技能）の問題ではないと考えられる。もしそうであるならば資格試験には合格しなかったはずである。だとすれば、数値化できないような、例えば思考や性格などといった特性に帰する問題だったのか。ただし、これに関しては筆者自身が自らを語っても客観的な評価にはならないので、他者から見た筆者の特性を比較的好くあらわしていると思われる資料をここでひとつ紹介しておきたい。大学時代のゼミの指導教官に作成してもらった「推薦状」が今現在も手元に残っている。以下、指導教官による筆者のゼミ活動における客観的な人物評価である。

粘り強い努力家で、責任を負った事柄には集中力を注いで遂行する。サークル活動では史跡研究会の副部長を務め、部員の信頼も厚い。軽率なところがなく、着実。一見、社交性に欠けるやに見えるが協調性をもつ<sup>22)</sup>

就職試験を受けるにあたっての企業に提出する推薦状なので、そのまま手放しに鵜呑みにするわけにはいかないが、とはいえ概ね的を射た評価ではないかと自身でも思う。ちなみに「粘り強い」「努力」「着実」といった特性は父方である中山家の血筋といってもよい。中山家は少なくとも3代続いた職人の家系であり、伯父の代までは大工を生業としていた。また父親も高校を卒業してから公務員（消防士）として定年まで勤め、4人に共通している特性は、先に述べた筆者自身の3つの特性とほぼ重なり合うといってもよい。ただし「粘り強い」「努力」「着実」というと強みや長所になるが、これらの行為を弱みや短所に言語変換してみると「しつこい」「手を抜けない」「不器用」とも言えるわけで、これはまさしく職人氣質とよばれるものである。

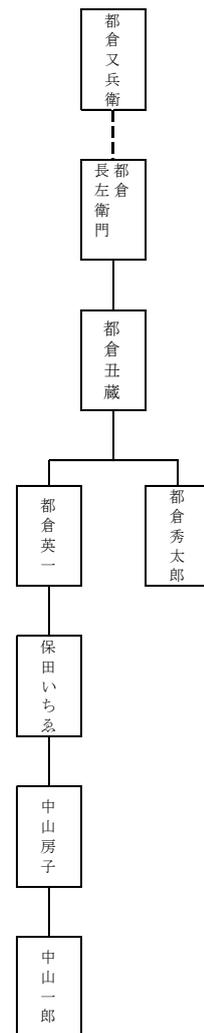
そこで今いちどキャリアカウンセラーという職業の内容を確認してみると「個人にとって望ま

しいキャリアの選択・開発を支援する」と定義されており、特に「個人にとって望ましい支援」などといったあたりは職人氣質的な特性ではとてもやっていけそうには思えない。

ということで、漠然とではあったもののこの特性に関わる問題が、これまで筆者が感じていた「何か大きな欠落感」につながっていたのではないかという仮説を立ててみるに至った。そして、その「何か大きな欠落感」が一体何たるかという気づきを論理的に言語化すべく、本稿では「系譜学」を活用して自らのルーツを探索し、その行為をとおして、キャリアカウンセラーとして筆者自身のキャリア形成にその後いかなる「心の変容」を与えていったのかという調査・分析・考察を行っていく。

## 2. 調査の対象

父方の家系の特性は先述の通りである。筆者自身も多分に父方の家系の特性を受け継いでいるという主観的な自覚のみならず、第三者による客観的な評価も一致していることが確認できた。ということで、本稿における調査の対象は、必然母親の家系に絞られてくる。ちなみに母親は、あくまでも筆者から見て主観的な見解ではあるが、その特性を中山家と同様に3つあげるとするならば「明朗」「外向」「楽観」といった印象や言葉が即座に思い浮かぶ。父方の家系と真逆の特性を有しているというのは多くの母親を知る人たちとも一致する認識であり、そのような母親のキャリアを形成していった家系とは、いかなる一族であったのかということについては、以前より気にはなっていた。なかでも気になっていたのは祖母の存在であった。実は母親には「生みの母」と「育ての母」の3人の母親が存在しており、「生みの母」は戸籍簿を確認すると明治41年3月31日生まれで昭和10年1月13日死亡と記載されており、母親は昭和7年3月31日生まれなので、つまりは母親が2歳のときに「生みの母」は27歳で死亡したことになる。当然のことながら母親は「生みの母」に関しての記憶は何もない。ちなみに、母親と「生みの母」の誕生日は同じ3月31日だということは、本研究の調査の中で戸籍簿をみて筆者もはじめて知った。今回は母方の父方のルーツを探索するという選択肢もあったが、母親と「生みの母」の誕生日が偶然にも同じであるという機縁も後押しするかたちで、母親の母方のルーツを探索ことに決めた。



## 3. 母親の母方のルーツを遡る

### a. 戸籍による調査 — 祖母・保田いちゑと曾祖父・都倉英一のこと —

「ルーツ探しの具体的な作業は、次の四つに大きく分けられる」と丹羽基二と鈴木隆祐は述べ

ている<sup>23)</sup>。「Ⅰデータベース作り（戸籍、旧土地台帳の調査）」「Ⅱ親戚への取材」「Ⅲお墓などへの調査」「Ⅳ研究（図書館での資料調査、郷土史家への取材）」という4つの基本行程である。ということで、まずは「Ⅰデータベース作り」から開始すべく、母親と「生みの母」の家系を遡るために入手可能な限りの戸籍（現戸籍・除籍・改製原戸籍）<sup>24)</sup>を役所で取得し、その戸籍データを元に作成したのが、図1の「都倉家略系図」である。結果として、確実な先祖としては筆者を含めて6代前の高祖父の父まで確認することができた。まず、筆者の母親が中山房子（昭和7ー・以下、房子）である。母親の「生みの母」は保田いちゑ（明治41ー昭和10・以下、いちゑ）といい、昭和6年に祖父の保田三治と結婚した。しかし、先述の通り母親が27歳のときに他界しており、房子も実母のことにほとんど記憶がないという。ただ、唯一記憶していたことは「高砂<sup>25)</sup>の紡績会社で女工として働いていたが、そこで胸を病んで亡くなってしまった」のだという。戸籍によると、いちゑの本籍地は兵庫縣加東郡天神村と記載されており、4人姉妹の次女として生まれたが、長女「りよ」は15歳、三女「まさ子」は28歳、そして四女「かずゑ」は19歳でそれぞれ死亡している。4姉妹とも短命ではあったが、さらに調べてみると4姉妹の父である都倉英

一（明治17ー大正7・以下、英一）もまた35歳で死亡している。しかも、いちゑ以外の3姉妹は生涯独身であったかと思われる。なので、現在となつては従弟もおらず、なぜ5人が短命であったのかという理由に関しても、英一の唯一の血脈者である房子ですら知らないという状況なので、彼女らが一体どのような特性をもった人たちであったのかということなど今や知る由もない。ただ、これで都倉家の特性を知るための手がかりがまったく途切れてしまったというわけではない。戸籍によると、英一には都倉秀太郎（明治14ー昭和39・以下、秀太郎）という兄がおり、都倉家の本籍地である兵庫県加東市天神に行けば、何かしらの新しい情報が得られるのではないかと考え、とりあえず現地へ行ってみることにした。

#### b. 菩提寺におけるインタビュー調査 — 曾祖伯父・都倉秀太郎のこと —

都倉家の本籍である兵庫県加東市天神は、兵庫県の中央部よりやや南よりに位置し、江戸時代までは加東郡天神町とよばれていた。「現在の東条町天神は、近世までの天神谷村と天神町が明治10年に合してできた大字である。天神町は天神谷村の中央部に成立した町場で、近隣の人々が生活必需品を求める所であり、また宿場町でもあった」<sup>26)</sup>といった土地柄で、さらに天神は「現今中筋、佳地、戸坂、谷山の四垣内あり。天神町は天神谷の中間に位する字中筋の一小地域にして、所謂京都大坂両街道の分岐点に当り古来交通の上の要衝」<sup>27)</sup>であったという。都倉家の本籍地は住所からすると中筋の街道筋沿いにあつたと考えられる。

筆者が「Ⅰデータベース作り」を終えて加東市天神へと向かったのは2013年3月14日<sup>28)</sup>である。現地に向かう前に加東市役所に立ち寄り、簡単に事情を説明して情報収集を試みたところ、天神の中筋に教正寺という寺があるという。しかもその寺の住職も同じ「都倉姓」だという

ことで、まずはそこを訪ねてみるのがよいのではというアドバイスもらった。

寺の正式名称は真宗 興正派 安養山 教正寺という。住職である都倉照純氏（以下、住職）は、突然の訪問であったにもかかわらず快く迎えていただいた。挨拶もそこそこに「いちゑと英一親子のこと、そして英一と秀太郎兄弟のこと」などを早速訊ねてみると、いちゑと英一についてはわからないが、秀太郎については直に面識もあったという。住職によれば、秀太郎は当時染物屋を営んでおり、屋号を紺屋（こおや）といった。当時の店のあった場所を教えてもらうと、寺から百メートルと離れていない。染物にはきれいな水が必要であるが、今も井戸だけは残っているという。重ねて住職に秀太郎に関する事で何か覚えていることはないかと訊ねてみたところ、次のような思い出話をポツポツと語ってくれた。

秀さんは腰の低いひとで、細めの顔をしていて、猫背な感じでした。穏やかな優しい性格で、念仏者というか、いわゆる妙好人<sup>29)</sup>とでもいうのでしょうか、とても信仰心の篤いひとでした。ここによく来てじっと長い時間、念仏を唱えておられました。

先述した通り教正寺は興正派の浄土真宗（以下、真宗とも言う）の寺であり、かつては天神の中筋を中心として50軒位の檀家がいたそうである。住職の話を書く限りにおいては、秀太郎は非常に熱心な檀家であり門徒であったようだ。しかし秀太郎一家はその後、ある大きな不運に巻き込まれてしまい、天神にあった先祖伝来の家産をすべてを失ってしまって、止む無く兵庫県高砂市に転居することになってしまう。

### c. 郷土史資料等による調査 — 高祖父・都倉丑蔵のこと —

戸籍によると、英一と秀太郎兄弟の父は都倉丑蔵（嘉永2—大正15・以下、丑蔵）という。住職も当然のことながら世代的にも直接の面識はなく、丑蔵にまつわる逸話や口碑なども特に聞いていないという。丑蔵は江戸時代の嘉永2年という幕末に生まれ、大正15年に他界している。

結果として、具体的な人物像や人間性についてはわからなかったが、しかし以外なところでその名を偶然にも発見することができた。地元の2冊の郷土史資料の中で三カ所、丑蔵の名前は登場していたのである。二カ所登場しているのは『東条町史 史料編』においてである。一カ所目は「明治十六年住吉橋架設約定証書」<sup>30)</sup>という為取換約定証書に加東郡天神村の村中惣代という肩書にて明治十六年十二月九日付けで署名と捺印をしている。二カ所目は「明治二十五年小学校事件契約書」<sup>31)</sup>という契約書に今度は加東郡上東条村協議委員という肩書にて明治二十五年五月六日付けで署名と捺印をしている。三カ所目は『東条町史 通史編』においてである。明治時代も中頃を過ぎてくると「郡も地方自治団体の一つとなり、加東郡も郡長と郡民に代表による郡議機関としての、加東郡内組合会によって運営されていた」<sup>32)</sup>。それに基づいて明治29年に加東郡の9つの村でははじめて郡会議員が選出されており、その掲載されている一覧表のなかに、上東条

村の郡会議員として「都倉丑太郎」なる人物名が記載されている<sup>33)</sup>。ただ、この人物が果たして丑蔵と同一人物であったかどうか、加東市役所に問い合わせしてみたが、もはや当時の資料や記録がまったく残っていないとのことで同定はできなかったが、加東郡天神村村中惣代から加東郡上東条村協議委員へて加東郡郡会議員に選出されたとしても何ら不思議なキャリアではない。郡会議員となるにあたって、何らかの理由があつて戸籍名ではなく通称を「丑蔵」から「丑太郎」へと改名したのであろうか。ちなみに、戦前までの郡会議員というのは無給であり、いわゆる村の有力者たちの名誉職のような仕事であつた。丑蔵も恐らくは染物屋を営みながら村や郡の政治にかかわっていたのであろう。丑蔵の人物像や人間性は直に伝わってはいなくとも、人間の特性を考える上では非常に重要である。

そして郷土史資料ではないが、もう一つだけ、丑蔵の名が記載されている資料が教正寺に残されていた。その資料とは明治41年に「蓮如上人の四百回忌御法会」を催すときに寺の執事たちが檀家有志に向けて義捐を呼びかけ、その義捐金額を細かに記載した『明治四十一年五月 法会執行教正寺執事』と記された小冊子である。その最初の頁に執事たち複数人の氏名と捺印が記載されているが、そこに丑蔵の署名と捺印も残されている。これで丑蔵も念仏者であつたことは確認できたが、長男の秀太郎と同様に妙好人であつたのであろうか。この署名と捺印を眺めていると、染物屋を経営し村会議員を務めていた丑蔵とはまたまったく別の横顔を垣間見るような気がする。

ちなみに丑蔵の父親は戸籍によると都倉長左衛門というが、そこに生年月日や死亡年月日などについての記載はなく、江戸時代に生きたひとであると考えられるが、今回の調査ではそれ以上の情報を得ることはできなかった。

#### d. 菩提寺に残された資料による調査 — 家祖・都倉又兵衛のこと —

ここで、加東市天神における都倉一族のことについて少し触れておきたい。住職によると、都倉姓はもともと天神の中筋に多い苗字だとのことで、新宅<sup>33)</sup>を入れると11軒あつたという。住職の言葉をそのまま借りて紹介するならば①「うち（教正寺）」、②「高砂へ行った都倉（筆者の家系）」、③「寝屋川へ行った都倉（竹職人をしていた）」、④「都倉百貨店の都倉（鍋屋本家）」、⑤「なべやの都倉（鍋屋の新宅）」、⑥「なべやの新宅の都倉（鍋屋本家の新宅の新宅）」、⑦「タツエさんのところの都倉」、⑧「豆腐屋の都倉」、⑨「尼崎で重電機電線の会社をしている都倉」、⑩「普のところの都倉」、⑪「渉のところの都倉」の11軒である。ちなみに普さんと渉さんというのは、住職の兄弟である。つまり、中筋の現在における都倉家の血縁関係を整理すると、①⑩⑪と④⑤⑥、そして②と③と⑦と⑧と⑨という七つの家筋に分かれているということになる。住職にこの七家の系譜的關係や血縁關係について確認してみたところ「同姓ではあるが、特に血縁關係はない」という。とはいえ、

ウーン、昔、どっかで分かれたのかもしれませんがあ…血のつながりはないで

すけど、他人という感じでもないし。何となく同族という感覚はあります。

とのことであった。都倉七家の系譜関係の探索や血縁関係の有無に関しては、都倉一族のルーツを探していくうえでの重要なテーマではあるが、今回の調査だけではよくわからなかったというのが結論である。しかしながら、民俗学や農村社会学でいうところの「同族」<sup>34)</sup>的なつながりをもっていたであろうことは推察される。

ただし、この都倉七家のなかで「教正寺の都倉家」が一族の本家、もしくは中軸的な立場や役割を担っていたことは間違いない。実は、先にも紹介した教正寺に残されている『明治四十一年五月 法会執行 教正寺執事』と記された小冊子に、寺の開基にまつわる由緒が住職の父親である都倉来順前住職によって書き記されている。以下は、その原文である。

柳モ当山ノ濫觴ハ文明九年十二月蓮如上人三丹州開教ノ□（一文字解読不明）当山の祖但馬守都倉又兵衛ハ東條谷小田村以東ノ郷士ニテ当時天神村字横田町ニ坊舎ヲ設ケ専ラ自力念佛ノ勤行者タリシニ上人ノ教ニ喜隨シ浄土真宗ニ改宗シ弟子トナリテ剃髮シ道誓ト法名ヲ拝受シ天正七年三月当天神町ヲ開キ是ニ移転シテ堂宇ヲ建立ス（以下、後略）

歴史的に検証すれば、辻褄の合わない記載もあるが、要は文明九年（1477）に都倉又兵衛（生没年不明・以下、又兵衛）という郷士がいて、もともとは天神村字横田町というところに坊舎を設けて自力<sup>35)</sup>の修業に勤めていたが、蓮如上人<sup>36)</sup>が三丹（丹波、丹後、但馬）に真宗の教えを広めにやって来たときに加東郡天神村にも立ち寄られた。そのとき上人の教えを聴聞していた又兵衛は大感激して、すぐさま自力念佛から浄土真宗に改宗し、蓮如の弟子となって剃髮し、道誓という法名をもらったというのである。そして天正七年（1579）には天神町という町を新たに拓いてそこに移って教正寺を建立したということが書かれている。ちなみにここに記されている由緒については、住職によれば昔から寺に伝わる口碑だという。

この由緒が史実か否かは別として、少なくともこの資料で実証できたことは、天神の中筋の都倉一族はおおよそ500年にもわたって真宗に帰依してきた門徒であったという事実である。

#### 4. 分析 — 都倉一族と浄土真宗 —

以上、本調査において、房子から又兵衛に至るまでのおよそ500年以上にもわたる都倉一族のルーツを遡ることができた。そこでわかったことは大きく2点である。まず1点目は、都倉家の先祖のなかで客観的な人物像や人間性をわずかながらでも確認できたのは秀太郎と丑蔵の2名だけであった。ただし、この2名からは、筆者が房子の典型的な特性として挙げた「明朗」「外向」「楽観」という因子までは確認することはできなかった。次いで2点目は、都倉一族と浄土真宗

との500年以上にもわたる深い関わりが確認できた。先述の通り、口碑によれば又兵衛は蓮如上人の弟子となり、自力念仏から浄土真宗へと改宗し、教正寺を建立して新たに天神町を拓いた草分けであった。その一族の子孫とも考えられる丑蔵は明治41年に行われた「蓮如上人の四百回忌御法会」において執事を務め、丑蔵の長男であった秀太郎は住職の思い出によれば信仰心の篤い妙好人であったということがわかった。以上の事項により、都倉家は加東郡天神町においておよそ500年以上にもわたって真宗と共に歩んできた一族であったということが確認できた。

## 5. 考察 — はからわない、という行為への気づき —

浄土真宗は言うまでもなく親鸞聖人（1173-1263）を宗祖とする教団の宗名である。その教義の要は「易行の道」<sup>37)</sup>であり、「本願他力」<sup>38)</sup>の教えである。そしてその根本法義は「本願他力の念仏においては、自力のはからいがまじらないこと」<sup>39)</sup>としている。

今回のルーツ探しの調査をひと通り終えた後に、過去に一度だけ房子が「南無阿弥陀仏」を唱えている姿を思い出した。筆者がまだ20代の頃に急病で倒れたことがあった。救急車が自宅に到着するまでの時間、リビングのダンスの上に置いてあった小さな仏壇に向かって房子はただ一心に手を合わせて「ナモアミダブツ」を繰り返して唱えていた。その時、房子の念仏はいったいどのような経緯で口から出てきたものなのであろうか。

筆者は本稿の研究動機において、自身のキャリアカウンセラーとしての資質に「欠落感」を抱いてきたことを告白するとともに、それが父親の父方から受け継いできた職人氣質的な特性と関わりがあるのではないかという仮説を立てた。そこで本研究においては自らのキャリア形成を促すためのツールとして系譜学的なアプローチを活用し、母親の母方のルーツを遡って先祖調査を試みたところ、特性を一般化できるまでの情報やデータを収集することはできなかったが、都倉一族の歴史には浄土真宗が深く密接に関わっていたという事実については同定することができた。

真宗の教えの要（根本法義）は先述の通り「はからわない」という一言に尽きる。では「はからわない」とはいかなる行為かといえば、「ありのまま」ということであり、あるいは「とらわれない」ことであり、「評価しない」ということでもある。

これらの行為は、筆者が中山家の典型だと示唆してきた「粘り強い」「努力」「着実」などといった職人氣質的な特性とは真逆の行為だといっている。実はキャリアカウンセラーという職業において、この「はからわない」というモノサシを手に入れることこそが最大の肝であり、知識やスキルを獲得する重要性の比ではない。にもかかわらず、資格試験というペーパーテストではけっして判断ができない行為なのである。そして、筆者がキャリアカウンセラーとして長らく抱えてきた課題とは、クライアントに対峙したときにまさしくこの「はからわない」という行為に対する「欠落感」ではなかったか。ともすれば、職人氣質的な特性がクライアントを「はからおう」

としてしまう。「はからう」ことはすでに「指導」や「コンサルティング」であって、キャリアカウンセラーという職業においては自明の構えであるところの「支援」や「カウンセリング」とはいえない。

ということで、本研究では筆者自らを調査対象とし、母親の母方のルーツを遡るという行為をとおして、自身のこれからの職業的なキャリア形成のための大きな気づきを得ることができたといえる。これが柳田も言うところの「無形の家督」であり、筆者が述べるところの「見えざる家督を承継ぐ」ということである。

## V. まとめ

2013年8月28日、筆者は住職に紹介いただき京都市下京区にある真宗興正派興正寺が運営する華園学院という僧侶の教師養成を目的とした学校に自らの意思でもって入学した。無論、僧侶になるためでも門徒になるためでもない。本研究において「はからわない」という行為への気づきを得て、頭では理解できたものの、それを身体に理解させなければならぬと痛感したからだ。それに気づく以前の私と気づいてからの私で、キャリアカウンセラーとして何かが変わったのかと問われれば、それはもはや学生たちやクライアントたちに訊いていただくしかない。

そして最後になってしまったが、本研究における今後に向けての課題であるが、やはりより客観的な実証調査は欠かせないと思う。本稿では筆者自身を調査対象者としてしまうという、ある意味掟破りの調査研究を試みたわけではあるが、本研究をさらに前進させていくためには、調査サンプル数を増やしていきつつ、その比較研究は必須であると考え次第である。

### 引用文献、注

- 1) NHK：ファミリーヒストリー ホームページ。  
(URL：<http://www4.nhk.or.jp/famihis/>, 2016年10月17日取得)。
- 2) 原作は1976年に発表された。著者アレックス・ヘイリーの先祖であるクンタ・キンテが1767年に西アフリカのガンビアかアメリカに奴隷として捕らえられ売られてきたというシーンに始まり、その後のアメリカにおける一族（子孫たち）の歴史を数代にわたって描いた壮大な物語である。日本ではTV放映後、「ルーツ」という言葉とともに、主人公の「クンタ・キンテ」という名前が社会現象ともいえる流行語となった。
- 3) 太田亮：「系図と系譜」、『岩波講座 日本歴史』8, (岩波書店, 1934) p. 4. において系譜学は、系図学、譜牒学、姓氏学、氏族学とも呼ばれていることを指摘するとともに、これら5つの呼称は結局同一と思ってよいと記述している。
- 4) 笹川孝一：『キャリアデザイン学のすすめ』（法政大学出版局, 2014）p. 264.
- 5) 太田亮：前掲書, pp. 4-5. (1)~(4)の内容については太田の原文を筆者が加工して記載した。
- 6) 太田亮：『姓氏家系大辞典』全三巻, (姓氏家系大辞典刊行会, 1936).
- 7) 丹羽基二（監修：樋口清之）：『家紋』（秋田書店, 1969).
- 8) 丹羽基二（監修：樋口清之）：『姓氏』（秋田書店, 1970).
- 9) 豊田武：『苗字の歴史』（吉川弘文館, 1971).
- 10) 網野善彦：「名前と系図をさかのぼる」、『中世の世界とは何だろう』（朝日文庫新刊, 2014）p. 190. ちなみにこの著書は単行本としては1996年に朝日新聞社から刊行されている。
- 11) 網野善彦：前掲書, p. 192.
- 12) 坂田聡：『苗字と名前の歴史』（吉川弘文館, 2006).
- 13) 大藤修：『日本人の姓・苗字・名前』（吉川弘文館, 2012).
- 14) 柳田國男：『先祖の話』（石文社, 2008）p. 31. 初版は1946年に刊行されている。

- 15) 柳田國男：前掲書，p. 30.
- 16) 柳田國男：前掲書，p. 31.
- 17) 柳田國男：前掲書，pp. 3-4.
- 18) M・マクゴールドリック、R・ガーンソン（訳：石川元、佐野祐華、劉イーリン：『ジェノグラム（家系図）の臨床』（ミネルヴァ書房，2013）p. 1.
- 19) 筆者が取得した資格の正式名称はCDA（Career Development Adviser）と呼称である。認定団体は2000年に創立され、認定機関は特定非営利活動法人日本キャリア開発協会（JCDA）である。実は日本では「キャリアアカウンセラー」という名称の正式な資格は存在していない。日本キャリア開発協会（JCDA）でも「キャリア・デベロップメント・アドバイザー」というのが正式名称であるが、資格が保持している特性（知識やスキル）を鑑みて、俗称として「キャリアアカウンセラー」という名称も併せて使用している。本書でも分かりやすさを優先してキャリアアカウンセラーという名称で統一することにする。
- 20) 特定非営利活動法人日本キャリア開発協会：ホームページ。  
（URL：<https://www.j-cda.jp/cda/basic.php>，2016年11月13日取得）。
- 21) 新村出編：『広辞苑』第六版，（岩波書店，2009）p. 1610.
- 22) 1984年9月25日、甲南大学教授だった畑井弘が、筆者が就職試験を受ける際に作成してくれた推薦状の推薦文。
- 23) 丹羽基二・鈴木隆祐：『自分のルーツを探す』（光文社新書，2006）pp. 89-90.
- 24) 中山房子（旧姓・保田房子）の本籍地は兵庫県神戸市長田区水笠通（現在は須磨区水笠通）で、2013年1月23日に神戸市長田区役所にて改製原戸籍を取得した。都倉家に関する戸籍は中山房子の改製原戸籍によって、保田いちゑ（旧姓・都倉いちゑ）の本籍地が兵庫縣加東郡天神村（現在は兵庫県加東市天神）であったと確認できたので、2013年3月14日に兵庫県加東市役所にて取得可能な除籍簿すべてを入手した。
- 25) 兵庫県高砂市。いちゑの夫であった保田三治の本籍地であり、結婚してからも住んでいた。
- 26) 東条町史編纂委員会編：『東条町史 本文編』（兵庫県加東郡東条町，1995）p. 353. この町史では「東条町天神」と記載されているが、加東郡天神町は明治22年の市町村制の施行によって加東郡上東条村ノ内天神となり、次いで昭和28年の町村合併促進法の施行を受けて昭和30年には加東郡東条町天神となり、さらに平成18年に社町、滝野町、東条町が合併して現在の加東市天神となった。
- 27) 加東郡教育会：『加東郡誌』（加東郡教育会，1923）pp. 159-160.
- 28) 表記した日付は本研究のために筆者が記入したフィールドノートに基づく。以降の日付表示も同じ。
- 29) 妙好人とは、「浄土系信者の中で特に信仰に厚く徳行に富んでいる人を妙好人と呼んでいる。彼は、学問に秀でて、教理をあげつらうというがわの人ではない。浄土系思想を自らに体得して、それに生きている人である」と鈴木大拙は『日本的靈性』（大東出版社，2008）p. 169. において説明している。
- 30) 東条町史編纂委員会編：『東条町史 史料編』（兵庫県加東郡東条町，1995）pp. 394-396.
- 31) 東条町史編纂委員会編：前掲書，pp. 497-498.
- 32) 東条町史編纂委員会編：『東条町史 通史編』（兵庫県加東郡東条町，1995）p. 412.
- 33) 新宅とは分家のこと。西日本では隠居などもいう。
- 34) 同族とは「本家・分家の系譜関係によって構成される家々の連合」のこと。福田アジオ他編：『精選 日本民俗辞典』（吉川弘文館，2006）p. 379. による。
- 35) 自力。阿弥陀仏の本願を疑い、自分の修めた身口意（からだ・言葉・心）の善根によって浄土へ往生しようとする。行者自身のはからいのこと。『浄土真宗聖典』註釈版 第二版，（本願寺出版社，2011）p. 1504. より引用。
- 36) 蓮如上人（1415-1499）。本願寺第八代宗主。
- 37) 阿弥陀仏の本願力によって浄土に往生してさとりを開く他力の道。易行は難行に対する語。  
浄土真宗教学研究所編：『浄土真宗聖典 歎異抄（現代語版）』（本願寺出版社，2010）p. 3. より引用。
- 38) 本願とは「仏が菩薩の時におこした誓願をいう。また衆生救済のためのまさしく根本となる願をいう。（中略）阿弥陀仏の四十八願中とくに第十八願を指す」。他力とは「阿弥陀仏の本願力のこと。阿弥陀仏が衆生を救済するはたらき」のこと。浄土真宗教学研究所編：前掲書，p. 3. より引用。
- 39) 浄土真宗教学研究所編：前掲書，p. 17.